

「古代の日本展」報告

国際交流の一環として、文化庁が米国スミソニアン研究機構およびアーサー・M・サックラー美術館と共同で、「古代の日本展」をサックラー美術館（ワシントン）で開催した。奈良国立文化財研究所もこれに協力し、資料の集荷と図録の解説執筆に携わり、展覧会場では出陳資料のチェック等を行った。展覧期間は1992年8月9日～11月1日。当研究所職員の派遣は、川越・館野・毛利光の順で、それぞれ滞在は約1ヶ月間であった。休館日はなく、ほぼ毎日一度、陳列の温・湿度等をチェック。余暇は図書室や収蔵庫あるいはボストンやニューヨークにまで出かけて資料収集した。事前の連絡をしておけば、資料を手に取り実測することができた。

展示は大部分を垂直に並べ、日本側で好評であり、照明も専門家がおり効果があった。期間中、10月2・3日にはシンポジウム「古代日本の美術・技術と社会」が開催された。2日は佐原センター長が「仏教以前の日本の絵画表現」と題して講演し、3日は当研究所では工楽室長が「弥生時代の技術」、町田部長が「藤ノ木古墳・高松塚古墳と正倉院」を報告した。

入館者数は計91,243人、一日平均はほぼ1,000人。サックラー美術館のアン・米村氏によると、地下で通じる他の美術館からの入館者は含まれておらず、実際の人数はさらに多く大成功であったという。次に「平城宮展」という声も騒がれたが…。 （川越俊一・館野和巳・毛利光俊彦）